



令和元年師走

城北中だより

城北中学校教育目標

- 思いやりのある生徒
- 真剣に学ぶ生徒
- 健康な生徒

生徒数

1年	173名
2年	156名
3年	176名
特別支援学級	6名
全校生徒数	511名

毬藻(まりも)が教えてくれたこと

校長 玉崎 芳行

“よっちゃん、またあした、あそぼうね”

年の瀬が近づいてくると、ふと蘇る記憶がある。私は、幼少の砌(みぎり)とは言え、人として恥ずべき行いをしてしまった苦い経験を持つ。幼稚園(年中クラス)に通っていた冬、初めて毬藻を見た時のことだった。

近所には、大の仲良しのかっちゃんがいた。いつも二人で遊んでいた。外遊びも中遊びも、互いの家に行ったり来たり。その日は、かっちゃんの家へ居た。かっちゃんがお母さんに呼ばれ居間から出て行った。残された私は、一人になった。飾り棚に置かれた、手のひらに乗るくらいの小さなガラスケースに入った毬藻が目にとまった。“きれいだなあ…” 私は、その毬藻を、かっちゃんに何も言わずにこっそりと家に持ち帰ってしまった。

晩ごはんの前に、家で毬藻を見ていた自分に母が気付いた。“お兄ちゃん、それ、どうしたの?”母は、何も答えない私に言葉を継いだ。“お母さんが買ってあげたものじゃないでしょ? どうしたの?”いつもの母の声と違っていたのは、おさな心にもはっきり感じ取れた。“かっちゃんの…”と泣きべそをかきながら答えるのが精一杯だった。

そのまま母に手を引かれ、かっちゃんの家へ行った。玄関先で母親同士が話していたが、全く覚えていない。しかし、かっちゃんのお母さんの後ろから、私をじっと見ていたかっちゃんは、はっきりと覚えている。そしてあの時の、何とも言いようのない心苦しきも、じんわりと蘇ってくる。母に背中を押され、一歩前へ出された。

“かっちゃん…ごめんね…” 泣きじゃくりながら絞り出したのが、そのひとことだった。

“よっちゃん、またあした、あそぼうね” いつものかっちゃんの、いつもの優しい笑顔だった。

そのひとことで涙がいつそう溢れた。嗚咽が止まらなかった。今にして思えば、「赦してもらえた。また、一緒に遊べるんだ。」と感じたのだろうか。帰り道、なぜだか母は、おんぶをしてくれた。母の背中が温かかった。

法治社会において、もちろん赦されないことがあるのは大前提である。ただ、人と人とが共に生きていく中で謝ることの大切さ、赦されることの有難さ、寛容であることの尊さを、チーム城北のかけがえのないあなたに、この一年の自分自身を振り返りながら、今一度、見つめ直してほしい。私は、この一年、どれだけの“ごめんなさい”を伝えたか。そして、どれだけの赦しをいただいたか。

年の瀬、毬藻を思い出す度、己の未熟さを痛感する。自分を映す心の鏡の大掃除をし、新しい年を迎えたい。